

杏林大医

○ 芝沢 政美

お茶の水女大家政

樽見 泰子

目的 衣服は着用されることを存在意義があり、そのゆえに人体の形、生理と緊密な関係をもつ。一般に形態と機能は便宜上分けて研究されるが、体の形は経年変化や姿勢・動作に伴なう変化の他に呼吸や重心の動揺などの生理学的因子の影響を受けたり、究極において両者は切り離し得ないものである。モアレ法を形態学に適用しつつ、この技法固有の問題点を明確にしかつ研究の方向性もある程度見出すためには雑多な情報を除去する必要がある。これを一貫して人体石膏像による実験を行なってきた。今回は少し視点を換え、過去に取って排除してきた生理学的な因子に着目し、これらが体の形の変化にいかなる影響を与えるかを観察した。

方法 立位姿勢をとった被検者（成人女子2名）の体幹を前後からモアレ撮影し、体表に標した基準点の移動を測った。

結果 1) 立位姿勢の動揺：被検者が6分間「楽な」立位姿勢をとって13回、10秒おきに撮影し、写真上で頸付根線、チエストライン、胸囲線、アンダーバストライン、胴囲線と前後の正中線との交点の座標を読んだ。鉛直方向の動揺は10mm以下であるが水平方向は個体差が大きく(10~30mm)、また被検者のひとりごは時間の経過についで点が後方に移動した。2) 呼吸による変化：最大吸気時には下胸部皮膚の伸展が顕著で、アンダーバストラインより上位の基準点は外側上方に移動する。最大呼気時には比較的变化が小さい。